

「私は林さんとも、先生ともツイッターのダイレクトメッセージでやり取りしていました。いま思えば、今回の事件に繋がる内容もありましたね……」

複雑な胸中を明かすのは、ぐらんけというユーザ1名で、ツイッターでの発信を続ける20代の女性だ。

昨年10月末、大久保はくらんげさんにこんなメッセージを送っていた。
（〇〇氏（林さんのユーザネーム）はご存じですか？）（以下極秘でお願いします）（わたしはツイをみて、人生に終止符を打ってほしいと近々〇〇氏の家にいくことになりました）
そして、
（とにかく魂だけでも救ってきまします）
林さんが実際に命を落としたのは、それから1カ月後のことだった。



とにかく魂だけでも救ってきまします
2019/10/29 21:01 くらんげさん (@IrreKranke) 提供
令和のドクターキリコこと、大久保容疑者

「大久保と山本のふたりが京都市内にある林さんのマンションを訪れたのは、昨年11月30日の午後5時半頃です。彼女は2011年にALS（筋萎縮性側索硬化症）と診断され、当時は寝たきり状態。24時間態勢で介護を受けていました」
事件当日、林さんはヘルパーに「知り合いが来る」と伝え、面識のない大久保と山本を自宅に招き入れた。ふたりは10分ほどで彼女の部屋を後にしている。
「その直後に林さんの容態が急変し、主治医が駆けつけるも119番通報した時には林さんは呼吸停止状態。その日の夜に死亡が確認されました。死因は急性薬物中毒。京都府警が捜査に乗り出し、マンションの防犯カメラ映像をもとにふたりを割り出したのです」（同）
京都出身の林さんは、同志社大学を卒業後、アメリカ留学して建築を学び、帰国後は都内の設計事務所に勤務。ALS発症以降は実家のある京都に戻り、現場となったマンションでひとり暮らしをしていた。

他方、容疑者のひとり、山本の口座には犯行の前に彼女から約130万円の現金が振り込まれていた。
山本は都内のED（勃起不全）治療専門クリニックで院長を務めており、彼を知る人物によれば、「港区のタワマン住まいで、ビジネスに明るいドクターという印象。ED治療のクリニック以外に、ヨウ素を原料にしたがん治療薬を製造する会社を立ち上げ、海外からの投資も募っていた。そのビジネスはマユツバでしたが、彼自身は温厚で、押しに弱い性格。安楽死に強い思い入れがあったとも聞かない。共犯者に引張られて犯行に加担してしまっただけじゃないか」
その「共犯者」こそが、
「確かに、先生の行為は現行法上、許されることでは

特集 生き地獄

スイスで「安楽死契約」の日本人女性が激白！ 嘱託殺人の被害者 私に吐露した「生



くらんげさん (@IrreKranke) 提供

話してくれてありがとう。なるほど、、、くらんげさんはずっとそんな風に。。。真逆の人間ですがわかります、孤独。私は周囲の雰囲気なんか気にできずに怒りをぶちまけてしまいますが根底にあるものは同じ孤独です「なんであんなにそんな楽しいの？！人がこんなに辛いのに！！」ほとんどの人は諦めてますが友人たちにはしつこく訴えてしまいます。「そうじゃないの、私がどれほど辛くて悔しいかを聞いて欲しいの！！」でもやっぱり患者にしかわからない。みんな自分のことで忙しい。

▶「死の権利」を手に入れるまで
▶法整備なしでは「ドクターキリコ」が暗躍か
亡くなった林さんは苦境を訴え続けた

分かったようなこと勝手に書いて気を悪くしたらごめんなさい。くらんげさんは私よりずっと長くこんな苦しみに耐えているんですもんね。。。

「林さんは私が安楽死関連のツイートをしているのを見てフォローしてくれまし

「こんなに辛いのは……」
林さんが自ら死を望むほど闘病生活に苦悩していたことは、彼女のブログからも明らかだ。
（普通にしているのに眉間にしわの辛そうな顔。唾液が垂れないようにペーパーと持続吸引のカテーテルもくわえ、操り人形のように介助者に動かされる手足。惨めだ。こんな姿で生きたくないよ（自分では何ひとつ自分のこともできず、私はいったい何を自分で自分という人間の個を守っているんだらう？）
くらんげさんが続ける。
「林さんは私が安楽死関連のツイートをしているのを見てフォローしてくれまし

日本ALS協会の会長で、患者でもある嶋守恵之氏は、本誌に寄せたコメントで彼女への理解を示す。

「気持ちにはよくわかります。身体が動かないのは自分だけで、この苦しみは自由に動ける人には決してわからないと思うこともある。声も出せないで、時には大声で泣く赤ちゃんさえ羨ましくなります。動けないし飲食もできず、いったん落ち込むと気分転換することも難しいです。家族の笑顔に恵まれている私は幸運だと思います」

林さんが病苦と孤独に苛まれる日々を、生き地獄と捉えたとしても、それを責めることはできません。そんな彼女が、くらんげさんと親交を深めていった



山本直樹Facebookより

共犯の山本容疑者

何か助言を頂けますか？裁判を起こすしかないのでしょうか？

宮下氏は17年12月に、世界6カ国の安楽死事情を詳細に取材したルポ作品『安楽死を遂げるまで』を上梓しており、林さんも読者のひとりだった。メッセージにある「ディングニクス」は、この本に登場するスイスの自殺補助団体である。

「林さんに限らず、私のところには難病の患者さんから多くのメッセージが届きますが、返信は一切していません。私は医師でも弁護士でもなくジャーナリストなので、彼らに助言をする立場にないからです。一方で、たとえ医師であつても安楽死が認められていない日本で今回のような事件を起こせば罪に問われる。それは当然のことですし、これまで安楽死を取材してきた私としても、酷い事件だと感じています」(宮下氏) 安楽死を容認するオランダには、かかりつけ医制度があるという。

には理由がある。

実は、くらんげさんも6歳で神経系の難病を発症し、20年以上にわたって闘病生活を送ってきた。病状が進行した現在は、両足や手首から先はほとんど動かさない。そして、彼女はある選択肢に行き着く。それがスイスでの安楽死だった。

スイスでは医師が自殺を補助する行為が容認されており、彼女は昨年、ライフサークルという自殺補助団体に入会し、安楽死に向けた手続きを進めた。

申請には本人の希望を記した嘆願書や、医師による診断書などが必要となる。しかし、彼女が治療を受けている病院は診断書を書くこと自体が「自殺補助」に当たるとして拒否。結局、知り合いの医師に依頼して診断書を書いてもらい、昨年10月、ついに団体から「補助可能」とされたのだ。いわば「安楽死の権利」である。

「両親はいまだに葛藤しているものの、私がスイスに渡航することは了承して」 「つまり、長らく患者を診てきた医師が、患者の容態を考慮して、また、その価値観や死生観までも理解した上で最期を看取るわけです。そうすることで残された家族も納得する。今回の事件では、逮捕されたふたりの医師がどこまで林さんのことを理解していたのか疑問が残ります。少なくとも、彼女のご遺族は彼女の死を悔やんでいる。安楽死は本来、家族が同意し、誰も傷つかない状況が理想です。その意味でも、今回の事件は安楽死と呼ぶに相応

らいました。コロナの影響でまだスケジュールは未定ですが、年内には渡航する予定です。ただ、現地に渡っても医師の診断を受けて

生きることに絶望

くらんげさんは林さんだけでなく、大久保ともメッセージの交換を重ねた。

「スイスのライフサークルから補助可能とされた私のことを、先生は「師匠」と呼んでいました。彼は呼吸器内科医として肺疾患で苦しみながら亡くなつていく高齢者をたくさん看取ってきたそうです。そして、患者から「死なせてくれ」と言われても何もできない自分を歯がゆく感じていた。とはいえ、林さんの自宅を訪れると知らされた時も、まさか囑託殺人を計画しているとは思いませんでした。うちで引き取る」という言葉もあつたので、林さんを転院させて緩和ケアを行うのだと思っていました。ただ、去年の11月13日に彼女から「ライフサークルに

「両親はいまだに葛藤しているものの、私がスイスに渡航することは了承して」 「つまり、長らく患者を診てきた医師が、患者の容態を考慮して、また、その価値観や死生観までも理解した上で最期を看取るわけです。そうすることで残された家族も納得する。今回の事件では、逮捕されたふたりの医師がどこまで林さんのことを理解していたのか疑問が残ります。少なくとも、彼女のご遺族は彼女の死を悔やんでいる。安楽死は本来、家族が同意し、誰も傷つかない状況が理想です。その意味でも、今回の事件は安楽死と呼ぶに相応

いる期間はキャンセルが可能なんですね。私もそれまでに生きる理由が見つければ安楽死をしないかもしれません」(くらんげさん)

支払った費用を教えてほしい」と尋ねられたんです。ほぼ同額なので、いまにして思えば、先生たちに渡す金額の参考にしたのかもしれない

その後、林さんと連絡が取れなくなりましたが、「てっきり病気が原因で亡くなったのかと……先生とのやり取りは続けていましたが、逮捕の1〜2週間前に彼のアカウントが削除されたんです。復活したと思つたら、警察が来てお縄になつたらどうしよう。こんな妄想をするようになって終わりだな」といったツイートを投稿されては削除される。その頃には、私のメッセージへの返信もなくなりました」 まもなく逮捕された「容疑者」と、息を引き取った

「被害者」の双方を知るくらんげさんは、「先生が100%悪いとは思いません。もちろん、罪の意識もあつたでしょう。いままで何もできないまま多くの患者さんを見取ってきたことへの罪滅ぼしという意味合いもあつたはずなんです。しかも、林さんは生きること絶望していた。ふたりの気持ちを考えたら、先生を有罪にしてしまつて本当にいいのでしょうか」

実は、林さんは、ジャーナリスト・宮下洋一氏のツイッターアカウントにも、18年4月にメッセージを送っている。 (ALS患者です。発症して7年になります。体は動きません。食べることも話すこともできないけど、人工呼吸器は着けていません。視線入力のPCで書いてます。ディングニクスでの安楽死を受けたいと考えています。付添い人が自殺補助罪に問われるか?という問題にぶち当たっています。どうすればそれを判明できるか、

一人称の視点

「つまり、長らく患者を診てきた医師が、患者の容態を考慮して、また、その価値観や死生観までも理解した上で最期を看取るわけです。そうすることで残された家族も納得する。今回の事件では、逮捕されたふたりの医師がどこまで林さんのことを理解していたのか疑問が残ります。少なくとも、彼女のご遺族は彼女の死を悔やんでいる。安楽死は本来、家族が同意し、誰も傷つかない状況が理想です。その意味でも、今回の事件は安楽死と呼ぶに相応

せん。ガラバガス化した終末期議論を打開しないと同様の事件が繰り返されてしまう」 危機感を募らせるのは、日本尊厳死協会の長尾和宏副理事長である。 ここで言う安楽死とは医師が致死薬を患者に投与する「積極的安楽死」のこと。患者の意思に基づいて延命治療を控える「消極的安楽死」、いわゆる尊厳死とは全く別物である。 「今回の事件は囑託殺人であり、言語道断です。しかし、いまの私たちに必要なのは被害女性の「一人称」の視点に立つこと。林さんには親も主治医もケアマネジャーもいませんが、それでも死を望んで外部に助けを求めました。どうか彼女と同じ立場で考えてほしい。そうすることでしか、この問題に関する議論を成熟させることはできません」(同)

「国が法整備をせず、曖昧にしてきたせいで今回のような事件が起きてしまった。たとえば本人と家族の意思を確認し、医者や弁護士などの審査を経て許可が下りれば安楽死が認められる。そうした選択肢も考慮すべきじゃないでしょうか」 他方、先の嶋守氏はこう指摘する。 「難病患者の死ぬ権利についての議論には不安を覚えます。生きるための励みや社会支援がおろそかにならないか心配だからです。難病患者でも生きられる環境を整えることが大切だと思います」

京都市警は犯人逮捕に際し、東海大学医学部付属病院で起きた安楽死事件に対する1995年の横浜地裁判決を考慮している。この地裁判決は、「耐えがたい肉体的苦痛がある」「死期が迫っている(他に苦痛を緩和する方法がない)(患者の明確な意思表示がある)」の4要件を満たせば、日本で

「国が法整備をせず、曖昧にしてきたせいで今回のような事件が起きてしまった。たとえば本人と家族の意思を確認し、医者や弁護士などの審査を経て許可が下りれば安楽死が認められる。そうした選択肢も考慮すべきじゃないでしょうか」 他方、先の嶋守氏はこう指摘する。 「難病患者の死ぬ権利についての議論には不安を覚えます。生きるための励みや社会支援がおろそかにならないか心配だからです。難病患者でも生きられる環境を整えることが大切だと思います」

「国が法整備をせず、曖昧にしてきたせいで今回のような事件が起きてしまった。たとえば本人と家族の意思を確認し、医者や弁護士などの審査を経て許可が下りれば安楽死が認められる。そうした選択肢も考慮すべきじゃないでしょうか」 他方、先の嶋守氏はこう指摘する。 「難病患者の死ぬ権利についての議論には不安を覚えます。生きるための励みや社会支援がおろそかにならないか心配だからです。難病患者でも生きられる環境を整えることが大切だと思います」

次週は夏季特大号です

8月6日(木)発売

特別定価 四百六十円

週刊新潮

8月6日号
440円



30